

日・朝 知識人の日光に対する見方とその相違

——朝鮮通信使と林羅山の日光詩を中心として——

朴 暎美

I . 序論

II . 日光詩に現れた相互の見方の相違性

1. 勝景と聖地としての日光

2. 日光を見る各々の視線：孝と仏、そして神

III . 交隣もしくは誠信

IV . 結論

I . 序論

「頌詩三百、授之以政不達、使於四方不能專對、雖多亦奚以爲」⁽¹⁾ といったように東アジアに於いて漢詩は使臣が身につけていなければならない教養のうちの一つであった。外交上の交渉にあつて相互間に誤解や誤読を招くことは断じて避けなければならないことなのに、どうしてそのような空間で漢詩をやり取りしたのだろうか。外交というものは結局、自国の利益を極大化するための交流・交渉の場である。政治的、経済的、軍事的、文化的な力が作用する空間であるが、どんな方式であれ二つの主体が疏通できなければ交流と交渉の成果を得ることはかなわない。疏通と交感のための余地、または緩衝剤として漢詩を用いたのではあるまいか。

漢詩で使臣を専対する方式は「次韻」「和韻」「呈」または「酬唱」など多様であるが、詩の本旨を明らかにすることは容易ではない。「詩言志」というが詩の意味が何であるか理解するのは「語」を理解するくらい難しいことである。詩人はひとつの語にいくつもの意味をこめることができる。それゆえ、一定の文脈の中で語の

意味が不適當な場合、読者はこれをみな排除し、本当に詩人が表現しようとする意味とその意味に随伴している意味を選択しなければならない。⁽²⁾

しかしひとつの単語が持ついくつもの相反する意味の中から、どれを中心の意味として選択するのかわからないことがたびたび起きるが、これにより Ambiguity⁽³⁾が発生するのである。Ambiguity が発生する理由はその根底に metaphor が置かれているからである。⁽⁴⁾

使行の専対は、詩は直接的である外交言辭を多分に metaphor として語るための装置であるため、詩から発生するこのような Ambiguity は行間を読み解く能力が要求される。

本稿では朝鮮通信使の使行録に残っている日光関連の詩と『林羅山文集』の日光詩を対象に使行時の専対のために作成された漢詩の Ambiguity についての解釈を試みようと思う。

朝鮮通信使は 1636 年、1643 年、1655 年のただ三回だけ日光へ行き、この時多量の日光山関連の詩を作成し、日本側では林羅山が日光関連の詩を同時期に作った。果たして彼らが語る「詩言志」の意味は何であっただろう。その「志」は日光山の美しさを詠ったのか、あるいはその裏面に他の意味があったのか。そしてその意味するものは何であったかを明らかにすることは結局、これは日光を詠った詩人の「志」、そしてその詩を読んだ読者の「志」を通してのみ可能であろう。

Ⅱ．日光詩に現れた相互の見方の相違性⁽⁵⁾

1. 勝景と聖地としての日光

1636 年 12 月 7 日、江戸に到着した朝鮮通信使一行は徳川家光より日光への遊覧という意外な提案を受ける。

前在三島之路。軍官輩。或仍率倭。頗聞關白使臣到江戸。欲與之偕往日光之說。所謂日光。即家康願堂所在之寺也。行中不以爲然矣。昏義成率僧綵首座。始以此言。來傳於首譯。有探問之狀。此不過試一行往否故也。可怪可惡。⁽⁶⁾

この記録によると朝鮮通信使は日光に徳川家康の願堂があるという事に対してはすでに熟知していたが、突然外交の例に外れたこのような要求が発生するとは予想しなかった。日本側が日光参拝を要求すると朝鮮通信使はこれに強く反発した。しかし、当時清の侵入により危機状況にあった朝鮮は日本との友好的な関係が必要であり、柳川事件⁽⁷⁾によって政治的危機に陥っていた対馬は幕府の信任を回復しなければならず、このような朝鮮と対馬の状況を考慮して朝鮮通信使の日光行きが強行された。朝鮮通信使の日光行きを決定した過程をもう少し見てみよう。

朝義成使藤智繩來請日光之行。仍謂洪喜男曰。火發主家。客不肯救。豈人情歟。喜男問其故。智繩曰。非謂不行。則大君有憾於使臣。又非謂不得請。則大君發怒於島主。大炊道春等言於大君曰。大君之請。所以尊敬使臣也。義成若肯周旋。使臣豈不許諾。或欲激怒。或欲搆捏。乘時造語。罔有其極。以此爲悶。洪喜男入以告曰。島主形勢十分危懼。以初九日。道春詰問事觀之。則不可謂無此事。朝廷既爲義成。有此通信之舉。苟有一毫可顧之事。恐不生梗。大概自通聘使以來。接待尊敬。未有盛於今日。小人多方聞見。則專出於誇張。斷無他意。已而義成兩僧又請。吾等相議曰。島主形勢。若或如此。終始不許。恐非出壘處變之道。昔鄭圃隱奉使至此。既多遊覽。前輩之行。亦有周覽寺刹之舉。而今者關白願觀日光。其請甚懇。其言甚遜。一番遊覽。恐無所傷。仍使洪喜男語之曰。國書未傳。遽請遊覽。何不識事體云。則義成語塞而退。夕義成通于洪喜男曰。俺以使道之言。入告于大君。則大君頗有慚色曰。使臣所言是矣。⁽⁸⁾

任統の記録によると朝鮮通信使に日光へ行くことを決心させたのは二つの理由からであった。一つ目の理由は庶変である。朝鮮通信使の日本派遣に先立ち朝鮮政府では日本で予期せぬ事が発生する可能性を感知し、使臣たちが外交上の原則を守ることも重要であるが、ときには融通性を発揮し、外交的摩擦を起こさないようにすることを要求した。これがいわゆる「庶変」であった。二つ目は先例があったからである。朝鮮通信使はこの度の遊覧の前に鄭夢周と申叔舟が日光を遊覧した先例があったために、この度の遊覧も可能なことであると決定を下し日光に向かうことに

した。

このような紆余曲折の末到着した日光はどんな姿であったろうか。1636年、朝鮮通信使の副使であった金世濂は日光山に到着し最初に杉を見て次のような詩を書いた。

仙都衆木摠芬芳 傳道靈杉自太荒
氣接扶桑增黛色 影通丹桂播清香
虬鱗百丈排霄漢 翠葉千齡傲雪霜
入夜笙簫求絶頂 願從高處駕鸞鳳⁽⁹⁾

日光山の入り口に立ちふさがる杉は千年の歴史を有するかのようには百尋の高さをもって空に向かって広がり、その威勢に圧倒されそうになった。しかし金世濂は杉の威圧感よりはこの場所を「仙都」「扶桑」の延長線、すなわち仙界として表象化した。これは仙界という思いが浮かぶほど美しい風光を持つ日光に対する讃辞であったのである。

仙遊不盡登臨興 雪積層崖踏遍難⁽¹⁰⁾

金世濂はこのように美しい風景を持つ日光を雪のために余すところなく見物できないのが残念なばかりであった。1636年、朝鮮通信使はこのように突然発生した日光を遊覧し漢詩を作った。彼らの詩は日光の美しい風光を仙界にことよせて吟じており、この「遊覧」を使行の疲れからしばし逃れた一種の休息と考えているようである。

このころ清のホンタイジは12月2日に瀋陽を出発し朝鮮侵略の途上にあつた。⁽¹¹⁾ 当時太学士として外交を担当していた林羅山は朝鮮通信使のこのような遊覧の態度を指摘した。次の文は林羅山が丙子年朝鮮通信使の日光訪問の経緯と礼拝、酬唱及びそれに対する自身の見解を披瀝したものである。(叙事、段落を区分してみると次のようになる)

- (1) 寛永十三年丙子冬十二月壬申朔 越丁丑 朝鮮正使通政太夫白麓任統字子滸 副使通訓大夫東溟世濂字道源 從事官通訓大夫青丘黃原字子由 來聘于江戸
- (2) 甲申 我源大君 御于前殿 三使奉國書貢方物 再拜甚愼 其儀儼然 於是奏請詣日光山而拜東照大神廟 聽之 壬辰入山 到庭燒薺 禮拜甚肅 事畢大僧正天海 出謁見相揖而去 暫憩櫻木坊以飲食焉
- (3) 題詠山中者律詩若干篇 其屬有詩學教官菊軒權伏亦從之 代三使作詩 蓋在其中與乙未還于江戸 它日餘見其詩 則彼輩未能詳山中事迹 唯賦其所見耳 倉卒之興 聽榮之言 是誠外國之人也 不可以尤之 然其博瞻之筆 馳于暫時 逸興之辭 出於食頃 可以嘉歎
- (4) 且所貴神德之廣覃四海 聲教之普被三韓 宜形諸歌頌 垂於竹帛 大君之美譽芳聲 與神德共 亦須永傳于不朽者也 歷代外國入貢者 考之國史可見焉 然未曾有如今日之盛者乎 昔嘗相與渤海襄大使相酬和者 數篇 余豈敢哉 雖不類也而其事亦類焉耶 遐想之餘 叨次其韻 聊補其迹 蓋慥慥爾

この文を見ると朝鮮通信使の記録と相異なる点がいくつか発見できる。(2)を見ると徳川家光に会った席で日光行きを朝鮮通信使が奏請したものと記述している。しかしこれは朝鮮側の記録とは符合しない部分である。特に(3)で林羅山は観光客として日光に行くことに対し強い不満を表した。林羅山は朝鮮通信使が観光だけを目的に日光に行ったので日光山の事迹を知ることなく結局風光ばかりを見てきたとした。林羅山が見たところでは、朝鮮の使臣たちは外国人だったのでそのような失敗をすることもあるが、日光山の本来の意味を知らずに詠んだ朝鮮人の詩は、単に旅行の面白味だけを詠ったものに過ぎないと見た。

しかしまさにこの部分が林羅山が(2)で朝鮮通信使側で日光行きを奏請したと記録したものと互いに矛盾する。朝鮮通信使が日光の事迹を知らずにどうして日光参拝を奏請することができようか。即ち、(2)の記録は林羅山の立場から叙述されたもので歴史的事実とは相異するといえる。これと関連して朝鮮通信使の日光行きを強制的にでも成し遂げようとした日本側の行動は後述する。

林羅山が通信使の漢詩に対し「博瞻之筆 馳于暫時 逸興之辭 出於食頃」という水準で称賛の言葉を述べたが、彼の本音はこれとは違った。(4) で見たように林羅山の考えでは日光を見て詠わなければならないのは風景ではなく、徳川家康の神徳とその教化を稱史する詩でなければならなかった。それで彼自身が考えるそのような詩を作り帰国の途につく使臣たちに返歌した。⁽¹³⁾ 以上のように朝鮮通信使と林羅山の間には日光行きを「遊覧」と「謁見」と見る視覚差が存在した。

徳川家康及び徳川幕府の成立にはなほ重要な意味を持っている日光であるにもかかわらず、1636年の朝鮮通信使は単に日光の風景のみを見ようとした。であればこれは林羅山が主張するように通信使が日光の事迹を知らないため発生した問題であろうか。しかし林羅山の主張は任統が明らかにしているように、すでに日光に徳川家康の願堂があるという事を周知していたことと、文禄・慶長の史実が日光へ行くことを強く拒否したことを見ると、事実ではないようだ。

1642年、関白の齢40才で男児を得て、日光山に新たに祠堂を創建したという理由で日光行きを正式に要請するや「三使が日光山へ向かったとき、勅筆、鐘、香爐、燭台、花瓶等の物品をすべからく準備し支給して、祭文は三使が携えて、香奠は貴国の礼法にのっとり行おう」と告げて「日光浄界 彰孝道場」という扁額を作り、詩文を題設したのだが崔鳴吉、李植、洪瑞鳳、李明漢、李聖求、李慶全、申翊聖、金蓋國等がこれに参加した。⁽¹⁴⁾

仁祖の「日光浄界 彰孝道場」という扁額で朝鮮が日光を眺める視線が以前に比べてよりはっきりしてきたことがわかる。扁額の意味を解釈すると日光は仏教の浄土のような所で徳川家光がその祖父に対する孝誠を表現した場所であるというのだ。日光が1636年には仙界として表現されたとすると、1643年には浄土と孝誠の空間として表象されたのである。李明漢は御命で作った詩で仁祖のこのような教示を忠実に遂行した。次にあげるのは李明漢の詩である。

日光道場。爲東照大權現設也。大權現有無量功德。合有無量崇奉。結構之雄。世未曾有。繼述之孝。益光前烈。我國聞之。爲鑄法鍾。以助靈山三寶之供。仍敍而銘之。是鍾也。

其質重。其韻朗。
 置安則安。懸正則正。
 天晴月明。海晏風靜。
 千萬億年。樂此此光景。⁽¹⁵⁾

李明漢の詩の序文を見ると大権現、即ち徳川家康の功德とその墓域を作った息子秀忠と孫徳川家光の孝誠を肯定的に評価していることがわかる。これは1636年の朝鮮通信使が風景としてのみ見ようとした態度とは異なる面だといえる。1643年の使行の正使であった趙綱は朝鮮側の変化した日光に対する考えを次の詩を通して見せてくれた。彼の日光詩は次の通りである。

銅鑄鴛鴦瓦欲流 黄金鸞鳳屋山頭
 玲瓏高棟凌霄閣 迢遞危欄絶漢樓
 夸父步簷愁兩脚 離婁入室眩雙眸
 將軍弘植煌煌業 洞徹諸天關六幽⁽¹⁶⁾ (下線は筆者)

趙綱は日光山と東照宮の美しさに讃辞をおくり、7句と8句(下線部)で徳川家康の業績を称える姿をも見せた。ところが1655年に至ると再び日光を風景として見る詩が登場した。従事官であった南龍翼は1643年、李明漢及び上記のもろもろの朝鮮人が書いた詩に次韻して次の詩を残した。

(1) 東表靈岑出半空 道師何日關仙宮
 神鐘古樂恩光賁 寶塔仙槽石勢雄
 踈雨激瀧飛雪白 晚霜酣葉暎霞紅
 曾聞老樹三根在 更說眞源十里通

(2) 青邱絳節下瑤空 手爇仙香禮梵宮

前後奎章八字煥 祖孫靈廟一山雄
天霜近積秋光白 海旭高騰曉早紅
雲衲老僧清似鶴 好音聊借象胥通⁽¹⁷⁾

(1)では日光の勝道上人により開敞されたこととその風景の美しさを書き込んで、(2)では朝鮮使臣が来て焼香したことと御筆を下したことを称えている。特にこの詩で南龍翼は東照宮権現堂を佛舎と認識している。

それならば林羅山の詩は朝鮮通信使とどんな差異があるだろうか。それを知るため朝鮮通信使の日光行きがあった前の資料を見ることにしよう。なぜなら林羅山の徳川幕府に対する態度が対外的な誇示のためのものかどうかを知るためである。次の詩は1628年4月、徳川家康の祭祀に参加して書いた詩である。

台駕攀躋二荒嶺 雲林猶護蹕兼警
山風草靡大常旗 靈德光輝添日影⁽¹⁸⁾

1628年、林羅山は大君徳川家光とともに徳川家康の忌日に日光へ参拝することになった。この詩では徳川家光の威厳と徳川家康の得業を詠っているのだが、これこそまさに林羅山の言う日光の事迹だったのである。林羅山にとって日光は美しい風景ではなく徳川幕府の始原でありその偉業をあらわにする聖地だったのである。林羅山はその詩集の中の『紀行』4・5・6巻で日光の紀行に関連する多数の詩を書いた。林羅山は東照宮及び大猷院の役事が進行するや大君に随行し日光を往来したとき、また徳川家康の忌日の祭祀に直接参与した後の感想及び状況を詩に形象化した。このように彼が徳川幕府の臣下として感じた日光の感懐は朝鮮通信使のそれとは懸隔の差があった。

1636年、朝鮮通信使は徳川家康の願堂がある日光へ行きその風景のみを詠ったが、以後1643年には徳川家康及び徳川幕府に対する肯定的な評価をする態度を見せた。だが1655年に入ると以前の態度より後退するような気配を見せる。しかし相変わらず日光の勝景に対する讃辞と華麗な美辞麗句は林羅山が言うように日本の

要求をある程度受容しながらも、徳川家康に対する直接的な讃辞はおくるまいという意志が入っていたのだった。日光を眺める朝鮮の「風景」と日本の「聖地」の間には徳川家康の神徳で天下を慰撫したと見る日本と、彼の功德は日本を安定させたのだと見る朝鮮の顕著な視角差が存在した。

2. 日光を見る各々の視線：孝と仏、そして神

当時朝鮮には徳川家康が豊臣秀吉を殺し朝鮮の怨恨を晴らしてくれたという認識があり⁽¹⁹⁾、丁卯胡亂時に見せた日本の武器支援など⁽²⁰⁾を通して日本が以前の侵略者から友好的な関係を築くことができる国になれるという肯定的な評価があった。

このような朝鮮の徳川幕府と日光に対する公式的な立場は仁祖の扁額である「日光浄界彰孝道場」と暁鐘の扁額である「靈山法界」に表れている。しかし「彰孝道場」と「崇孝浄院」は徳川幕府の当時の大君を指称して発言したものである。徳川幕府の東照宮（徳川家康の墓）と大猷院（徳川家光の墓）の造りはその孝心が発現したもので、日光はそのような孝心と仏教という二つの要素が結合した空間であるというのが朝鮮の視角であった。日本に贈った各種の祭文と鐘と灯籠にもこのような立場は堅持された。

次は 1655 年、通信使の日本使行に先立って作った蔡裕後の「法燈銘」である。

曩歲獲聞日光山中。爲東照大權現。廣設道場。既已鑄送法鍾。以彰誠孝。今又聞先貴大君眞宇竝建。遂冶成燈籠。轉達靈山。用助崇奉之具。仍讚永慕之意。而爲之銘曰。誕樹功德。竝參諸天。道場既闢。慧燈方懸。式鎔斯器。俾護神光。薦之法筵。吐焰煌。惟物之備。孝思攸切。萬代不昧。永耀洪烈。一作長明萬代。有耀洪烈。⁽²¹⁾

南龍翼も『扶桑録』で大猷院の祭文に「克昌于後。孝思逾篤」とした。⁽²²⁾ 続いて東照宮権現堂に対する致祭が終わった後、1643年に遣わされた朝鮮文士の詩に和答して作った詩には「前後奎章八字煥 祖孫靈廟一山雄」⁽²³⁾と詠った。このように朝鮮人の目には東照宮と大猷院がある日光は「おじいさんと孫」の神霊が宿る所で

あり、先祖を称える大君の孝誠を象徴する場所であった。

もう一つ、扁額が示すように朝鮮では大部分日光を佛舎と表象していた。1643年、日本側の要求で贈った詩巻の中に李植の詩が入っていた。

鯨波不動海氛空。龍象千秋護祕宮。
日色禪心同一照。山形祖印屹相雄。
雕欄迴壓鼇身黑。畫棟高浮蜃氣紅。
盛業洪休符傑構。扶桑天竺自神通⁽²⁴⁾

この詩の場合に見られるように朝鮮人は日本を仏教国家と、そして日光を仏教寺院の一つとして認識した。

しかしこのような朝鮮側の視角とは違い日本側では日光を神佛習合が顕現している場所という視角が支配的であった。日光の最も重要な場所である東照大権現（東照宮を指す）は東方を照らす権現という意味で伊勢神宮の天照大神の神名でもある。東照は関西の皇室を考慮し地域的には関東地域を意味するが、日本全域を制圧して威光が広く及ぶようにするという意図が込められている。⁽²⁵⁾ 東照宮に徳川家康が葬られたのは彼自身の遺言のためであった。

吾既古稀の齢におよび成すべき程の事はすべて成し了へたが故にこの世にまた思ひ残す所もないこの上は歿後必ず神となって永く国家を加護し⁽²⁶⁾

遺言によると徳川家康は死後も護国神になって日本を永遠に保護しようとした。それで自身の側近である天海を呼び、その遺言を具体的にどのように具現しなければならぬかに関して語ったのである。

天海を召して、法華止観の深意、山王神道の玄奥を伝へ、「現世安穩 後生善処」の御本意を遂げ給ふぞ、有り難く覚え侍る。かくて、御葬りの事は、「先ず当国久能寺に納め、一回の光景を送り、時に神号の事奏聞を経て授け賜は

るべきに於ては、大織冠の例を仰ぎて日光山へ移すべし。然れば神を当嶺に降して、永く国家を擁護し、子孫を視行はさん事違ふまじき」由、御誓約ありて元和二年四月十七日、七十五歳にて安然として薨御し給ひぬ。⁽²⁷⁾

徳川家康は江戸宗教政策の一貫として京都の比叡山勢力を江戸に移そうとする野心を持っていた。そのような時期に比叡山の寺院間で紛争が発生すると僧兵を保有していた最大の宗派である天台宗を牽制するために天海を抜擢し、宗教界での権力を与え比叡山経営の秘訣を学ばせた後、幕府の中枢に参画させようという意図を持っていた。⁽²⁸⁾ここに天海は天台宗を掌握することになったのだが、このことは即ち徳川家康が宗教界の統制権を掌握したということである。これをもって日光東照宮造営の与件が準備され、天海は造営を管掌し後に日光東照宮の座主になった。同様の過程を経て東照宮は神になった徳川家康の神殿になったのである。そうであるなら、朝鮮人がこの場所で致祭をするということは日本人にはどんな意味を持っていたのだろうか。

朝鮮王自撰祭文を日光山にをいてよましめらる。神徳國威の及ぶ所悦び思召むね。三家に仰ごと給はる。⁽²⁹⁾

日本は朝鮮人の致祭（日本はこれを参拝あるいは参詣とした）⁽³⁰⁾を徳川家康の徳化をこうむったことに対する感謝、ないしは服属の意味と解釈した。林羅山の詩でそのことを再び確認することができる。

東照靈威播異方 兆民欲敬德猶香
龍燈傳自琉球海 鯨韻吼從韓嶺霜⁽³¹⁾

林羅山はこの詩で琉球と朝鮮から贈られた燈と鐘について、まるで徳川家康および徳川幕府の恩恵に感服したり日本に帰依して贈られたもののよう表現している。林羅山は「朝貢」という単語をたびたび使っており、彼の文集巻第 23 にある「朝

鮮通信使来貢紀」の著作に見ることができるように、これを歴史的事実として認識している。

彼は朝鮮人が朝貢するようになったのは徳川家康の徳業のためだと考えたのだが、これは儒家の理想的な君主であった堯舜禹湯の徳業・教化とは多少の差異がある。次の詩を通してそれを明らかにしよう。

神君徳澤徹三才 到處風雲不惹埃
豈啻雨師清蹕路 蘇生天下兆民來⁽³²⁾

上記の詩で、神になった徳川家康は億兆蒼生に生命を与える神であるので、天下が帰依することはあまりにも当然のことだった。このように徳の前についている神は単純な修飾語ではなかった。これは神になった徳川家康と神の子孫である徳川幕府という意味で、その裏面には神格化を通して絶対的で安全な統治の具現という意味が込められている。同時にこの時期になると神仏習合ばかりでなく神儒習合が起き始めた。⁽³³⁾『次向陽子題日光山中詩韻 絶句八首律詩 一首東照宮』ではさらに露骨にそれが現れている。(向陽子は林羅山の息子林鷲峰(1618-1680)のこと)「皇明乞援朝鮮貢 豈啻英靈鎮日東」⁽³⁴⁾とした林羅山の発言はもちろん歴史を歪曲したものであるが、彼はこのように朝・日の交流を日本に対する朝貢として認識していた。朝鮮通信使の酬唱及び筆談に見える退溪学と朱子、朝鮮の詩文と文化に対する関心は文明としての朝鮮に対する敬意の表示ではなかった。

林羅山の3篇の詩は朝鮮使臣との酬唱詩ではなく、日光参拝時に作られたものである。外交的な酬唱という状況でたびたび使用されるレトリックとしてでなく林羅山自身の本心がよく現れていると言える。

以上、朝鮮は日光を佛舎あるいは孝の空間として見ようとする視角と対照的に、日本は神が顕現する場所と見ようとする差異を確認した。朝鮮が日光及び徳川家康の神格化に同調することができなかったのは、日本が言う神徳の教化に賛成できないからである。これは朝鮮との外交を「朝貢」として把握する日本と、その日本の政策に朝鮮が呼応できなかったことを意味するものである。

当時徳川幕府は日本を中心とする新しい世界観及び大アジア政策を樹立しようとしたが、これがいわゆる日本型華夷観である。一方朝鮮は清の登場を通して東アジアで自身だけが唯一の文明国だという自負心を持つようになるが、これは小中華主義である。日光に対する彼らの視角差は結局、朝日両国の小中華主義と日本型華夷観の衝突より生まれたものであった。

Ⅲ．交隣もしくは誠信

1636年、初めて朝鮮通信使が日光へ行くことになったのは任統等当時の使臣団の記録によると日本側の突発的な要求があったためであった。しかし日本側の記録を見るとこれは徳川家光が対馬藩主である宗義成に指示した事項で、事前に企画した行事であったことがわかる。

寛永十三年丙子信使來聘 賀大猷君殿下在位泰平也 信使到于東都之初 大猷君召義成公於殿中命之曰 汝今番伴信使登于日光山 可使渠致肅拜於東照宮大權現靈廟云云 義成公拜命退 歸本館 乃遣臣告鈞命於三使焉 三使對曰 日光之肅拜 原不受國命 自古無此例 決不可從云⁽³⁵⁾

朝鮮側では国命を受けていないことと前例がない点をあげて拒絶すると、日本内ではこれを貫徹させるために朝鮮の使臣を脅迫し始めた。これが貫徹されなければ以後、朝日関係が危急な状況に変わるということをふりかざしながらこれを貫こうとした。さらにはこれを受け入れない場合朝鮮使臣を殺すこともあったとした。

往昔太閤秀吉君討朝鮮 而生靈有糜爛之禍 彼不同一天之讎也 東照大權現誅伐大坂則譬如假手而報讎也 今番日光之肅拜 渠輩豈有可辭之理乎哉 三使有強聒不從 則殺戮二使 可回一使而告事狀於朝鮮云云⁽³⁶⁾

徳川幕府は朝鮮使臣が日光に行かなければ、朝鮮使臣を殺してでも必ず日光行きを成し遂げなければならないと考えた。であるなら、幕府はなぜ日光行きのために

このような危険な行動をも躊躇しなかったのか。これを解くためには当時の日本の状況を見てみる必要がある。

家光は旧秩序の中心舞台で新しい秩序の王的権力を誇示した。1634年、家光は日本史上今日まで最大の兵士（30万7千人）を京都に進軍させた。同時に家光は全大名の領地の所有権を認めた。翌年、改定した武家諸法度はその範囲を広め、武士が自由に結婚していたのを禁止し参勤交代を導入した。1636年にはまた朝鮮使節が江戸に来て日光の徳川家康の墓を参拝した。新秩序が反乱の試練を克服したのは1637年から1638年のことで、この時期島原の乱を鎮圧するために12万5千名の国軍を派遣した。⁽³⁷⁾ このような政治的状況下で朝鮮使臣の日光行きは徳川家光の武威を日本内に誇示する絶好の機会だったのである。

ならば、朝鮮はこのような無理な要求をなぜ受け入れたのだろうか。反正を経て即位した仁祖は政権を確立する間もなく清に侵略されその基盤が揺れていた。日本へ使臣が来て硫黄を求めることができるかを打診したのも清の再侵に対する備えの一つであった。しかし日本は公式的に武器の輸出を禁止していたので、硫黄の購入は対馬を通して非公式的になされるしかなかった。⁽³⁸⁾ 対馬の安定的な状況が即、朝鮮の軍備拡充と噛み合わさっていて、加えて日本の侵略を経験した朝鮮としては日本との交流がどれだけ重要であるか十分に認識していた。従って日本を刺激しない線で「庶変」を理由にしてこれを承諾したのである。

事実日本側の日光参拝のような無理な要求があるだろうということについては、朝鮮側でもある程度の予想をしていた。1636年7月23日に崔鳴吉は上疏をあげて交隣の道に関して語り、原則ばかりに固執せず場合によっては変通すべきだと主張した。⁽³⁹⁾ 甚だしくは崔鳴吉は対馬島主の壟断が起き得るという可能性も予告し、原則に縛られてことを誤まらないよう注文した。なぜならそれは当時韓半島を取り巻いて発生していた戦争状況の中で、また別の火種を呼び起こす心配があったためだ。武士を集めることが国家の莫大な弊害になるということで始まる崔鳴吉の上疏二つ目の内容は、結局一つ目の対外外交の重要性につながるものであった。原則ばかりに固執して外交を通して得ることができる成果を逃してはならず、それが特に日本の再侵略につながっては困るというのが崔鳴吉の主張であった。朝鮮通信使は

戦争の抑制という目的のために日本の無理な要求を受容したのである。ところが、日本の要求はこれに留まらなかった。徳川家光の息子が誕生すると通信使を要求するという前例の無いことが発生したのである。⁽⁴⁰⁾ このような日本に対し 1636 年、副使であった金世濂は次のように本音をもらした。

異區隔風壤 大海中爲界
 習俗上首功 居民雜水怪
 終當九世復 適得二家解
 敵情尚未測 馬島一何猶
 甘言挾虚喝 陰謀左右賣
 < 中略 >
 至樂貴知心 神交非外話
 永垂千載名 麟臺共圖畫⁽⁴¹⁾

朝鮮は日本に対する文禄・慶長の役の怨讐をいまだ果たしていないのに、再び和解することになった。金世濂にとって彼らは本音を知ることのできない相手であり、甘言と恐喝、陰謀が横行する国なので本当の交隣ができるか懸念したのである。交隣は美辞麗句だけでできるものではないのに或はそうなるのかと心配だったのである。交隣のためには誠信が前提になくてはならない。これが 金世濂が考える交隣の前提条件であった。金世濂が対馬で詠んだ詩には、もう一度朝鮮がいう誠信が述べられている。

王幣示誠信 節鉞表將命
 禮以專對重 事爲生靈請
 < 中略 >
 往事須可戒 曩轍慎勿幸
 兵端鬼所疾 殺機人敢呈
 曾是荷生成 始終宜自靖⁽⁴²⁾

朝鮮の王は日本へ誠信を象徴する幣帛を贈り交隣の友誼を深めようとするが、これは塗炭の苦しみをなめている朝鮮の民生を救うことがその目的だったのである。日本が過去の戦争を再び勃発させないという約束をすること、これこそが日本が朝鮮に見せなければならない誠信であった。なぜなら戦争とは人のすることではなく、鬼もいやがることだからだ。日本は再侵をしないという信念を見せなければならなかった。1655年の使行時に作った南龍翼の『萊館書懷得長篇四十韻呈兩使兼示讀祝李文哉』でも通信使の使行の目的が結局、文禄・慶長の役と、その戦争の記憶から生じた日・朝間の平和を希求する外交的対応であったということを語っている。

緬彼日本城 南風曾不競
二陵尚含羞 忍說龍蛇橫
罪貫自就滅 源氏剗平姓
廟算出權宜 十年修一聘。⁽⁴³⁾

しかし、朝鮮の対日外交政策が交隣誠信の談論の下で日本の再侵略を防止することに目的を置いた反面、日本は徳川家康が朝鮮侵略者である豊臣秀吉を征伐したことが朝鮮との国交回復のために彼らが見せる最も大きな誠信であると主張した。

往昔太閤秀吉君討朝鮮而 生靈有糜爛之禍 彼不同一天之讎也 東照大權現誅伐大坂 則譬如假手而報讎也 今番日光之肅拜 渠輩豈有辭之理乎⁽⁴⁴⁾

そうかといって日本が朝鮮との外交を軽んじていたのではない。この三回の通信使行で見せた日本の接待と態度を見ると、他のどんなときより朝鮮を重視したことがわかる。日本も朝鮮に対しひたすら交隣誠信を外交の指標として対したが、彼ら相互がいう「誠信」は一致することができなかったといえる。朝日両国の誠信（真正の信頼）を基礎としていない交隣は、相互の経済、政治、軍事的利益のために持続することができたとしても、その中に内在するお互いに対する距離感を克服する

ことは容易ではなかつたろう。林羅山が前に朝鮮人の日光詩について、日光の事迹をろくに知りもせずに見たこと、〈風景〉だけを書いたと評したように、朝鮮は日光の別名である二荒に幕府の開祖を弔ったことを嘲弄するということが発生したのもそのような理由によるものだったといえよう。⁽⁴⁵⁾

朝鮮通信使は荒山に開祖を弔ったことを恥とせず、かえって誇りとする徳川家光の無知を非難した。しかし二荒は補陀落の訓借であった。⁽⁴⁶⁾ 補陀落は Potalaka の音借で観音菩薩の居住するところという意味だ。日光という地名は補陀落、つまり二荒（フタラ）から二荒（ニッコウ）と音読され、音が同じ日光（ニッコウ）になったのである。

このように誠信が前提となっていない交隣は相手に向き合わず、自分の事だけを主張する一種の自閉的症状を見せる。その間に間隙はさらに進み、視線の較差とこれに伴う「危機」的状況は結局互いに適切な妥結を要求するしかなかった。まさにこの瞬間が詩の Ambiguity が発揮されるときであった。

南龍翼の『扶桑日録』10月30日条に記録されている南龍翼と林羅山の詩はすべて日光の美しさを詠っている。⁽⁴⁷⁾ 南龍翼の日本に対するうっぶんも林羅山の朝鮮に対する軽視もこれらの詩には入っていない。ただ美しい日光についての描写と讃歌があるばかりである。このように外交にあつて漢詩の機能は文明を誇ることばかりでなく、互いの刃のような対立と衝突を「詩」という metaphor で疏通させたのである。

IV. 結論

本稿では1636年、1643年、1655年の朝鮮通信使の使行時に作られた日光詩と林羅山の日光詩を対象に、詩の中に形象化されている彼らの「志」を探そうとした。詩の Ambiguity は日光詩を単純な遊覧の所産物と読ませることもできたし、朝日間の先鋭な対立と見させることもできた。

風景を単純に風景としてだけ読み得ない時代。清算されず治癒されない文禄・慶長の役の傷口を胸に抱いていなければならなかった朝鮮の使臣と、風景を風景としてだけ読ませることのできない、江戸という新しい時代での転換を完成させなければ

ばならなかった日本。日光はまさにこのような二つの主体が出会った空間だったのである。この中で日光を詠った漢詩は朝日両国の対立と衝突という危機の瞬間を「詩」という metaphor を通して疏通を試みようとした。二国間の交流にあって「疏通」というのはあまりにも当然なことばであるが、これまで朝鮮と日本の交流についての研究は自国一辺倒であったと言っても過言ではなく、この部分に対して照明が当てられることはまれであった。自国中心の研究は自身の声だけを聞くのみである。結局、研究者も過去のトラウマを克服できないまま、今もそれを再生産する可能性があり得る。であるから、この朝・日のふたつの空間を同時に置いてみる研究が必要である。彼らが衝突し、対立し、侵略し、非難し、頼ったすべてのこと。それは朝鮮と日本の過去であり、これからも持続するであろう未来であるからである。

注

- (1) 「子路」、『論語』巻16
- (2) 使臣の専対詩 詩人と読者は固定されたものでなく結局相互的である。詩人が読者であり読者が詩人に、互いに直・間接的に 酬唱する間であるから。
- (3) Ambiguity について William Empson は詩的言語の本質として Ambiguity を積極的に使用した。彼は一つのテキストが2種類以上の解釈を許容する能力と定義し、それは同じ言語作品に対して違う反応をする余地を与えるので、どんなに小さいニュアンスであっても、それまでを含めた言語上のすべてのニュアンスだとした。Joseph Childers 著、黄鐘淵訳、『現代文学文化批評用語辞典』、文学トンネ、1999、p. 67 参照。田大雄「William Empson の分析批評」、『英美語文研究』15、韓国英美語文学会、1974、p. 79-95、参照
- (4) 劉若愚著 李章佑訳、『中國詩學』、同和出版公社、1984、p. 23-24
- (5) 日光詩とは日光を素材にした詩をまとめて便宜上つけたもの。
- (6) 任統、12月8日、『丙子本日記』、韓国古典翻譯院 <http://www.itkc.or.kr/> 検索日 2010.08.25
- (7) 柳川事件は韓国では国書改作事件という。この事件は対馬藩主、宗義盛と家臣、柳川調興の間に発生した紛争である。柳川氏は貿易の才能を認められ早くから対馬の宗氏に仕えた。とくに柳川調興の祖父である調信が島主、宗義調に重用されてから島内及び朝鮮との交渉でその地位を築き、貿易面でも朝鮮からの受圖倭人の資格を獲得し、独自の柳川の歳遣船を釜山浦へ派遣した。ところが徳川政権が成立してから幕府では柳川氏に特別に諸太夫の地位と食禄を与え駿河に居住させ、まるで直参のような待遇をしながら宗

氏の朝鮮外交に対する既得権を多少牽制し、調興のときになると島主の立場を無視する状況に至った。宗氏の国書造作を告発し柳川調興が君臣の関係の清算を要求して以後幕府の裁判を受けるようになり、その後宗氏は勝訴したが、この事件の結果として対朝鮮外交は幕府の管轄下に置かれることになった。崔宗一、『朝鮮通信使の日光山致祭研究』、江原大専校碩士論文、1998, p. 4-6. 参照

- (8) 任統、12月11日、上掲書、韓國古典翻譯院 <http://www.itkc.or.kr/> 検索日 2010.08.25
- (9) 金世濂、「靈杉」、『槎上録』、韓國古典翻譯院 <http://www.itkc.or.kr/> 検索日 2010.08.25
- (10) 金世濂、「日光寺」、上掲書、韓國古典翻譯院 <http://www.itkc.or.kr/> 検索日 2010.08.25
- (11) <http://enc.daum.net/dic100/contents.do?query1=10XXX10037> 参考、検索日 2010年8月25日
- (12) 林羅山、「和朝鮮三使日光山中詩并序」、『林羅山詩集』卷第47、p. 509-510、弘文社、1930
- (13) 林羅山、上掲書
- (14) 『増訂交隣志』第5巻、韓國古典翻譯院 <http://www.itkc.or.kr/> 検索日 2010.08.25
- (15) 李明漢、「日本國日光山鍾銘并序承命製進」、『白洲集』卷之十三、韓國古典翻譯院 <http://www.itkc.or.kr/> 検索日 2010.07.25
- (16) 趙綱、「題日光寺」、『東槎録』、韓國古典翻譯院 <http://www.itkc.or.kr/> 検索日 2010.08.25
- (17) 南龍翼、10月18日、『扶桑日録』、韓國古典翻譯院 <http://www.itkc.or.kr/> 検索日 2010.08.01
- (18) 林羅山「寛永戊辰四月奉從台駕於日光山 時稻丹牧有倭歌二首耦語 余於是採其末字爲韻賦二絶句并又作兩章以示不見之者」上掲書、卷第4、p. 47
- (19) 『増訂交隣志』卷5、韓國古典翻譯院、<http://www.itkc.or.kr/> 検索日 2010.08.25
秀吉の死後、関白家康が対馬の宗義智を通じて意志を伝えるが、それによると「壬辰年(1592、宣祖25)のことに就いては私は関東にいたために予め知ることができませんでした。ましてや今は平賊の誤りをすべて正したので真に仇ではありません。ともに和親することを望みます」と語った。
- (20) ムンヨンギョ、「仁祖代対日外交の性格」、『韓日關係史研究』第19集、2003、p.83-84
- (21) 蔡裕後、「日光山法燈銘并序」、『湖洲先生集』卷之五、韓國古典翻譯院 <http://www.itkc.or.kr/> 検索日 2010.05.01
- (22) 南龍翼、『扶桑録』、韓國古典翻譯院 <http://www.itkc.or.kr/> 検索日 2010.07.21
- (23) 南龍翼、「行禮後次權現堂所藏我國諸賢韻」、『扶桑日録』、10月18日、韓國古典翻譯院 <http://www.itkc.or.kr/> 検索日 2010.08.25
- (24) 李植、「日本國日光山詩。次太學士韻」、『澤堂先生續集』第5巻、韓國古典翻譯院 <http://www.itkc.or.kr/> 検索日 2010.08.25
- (25) 菅原信海、「南光坊天海大僧正と家康公」、『日光山輪王寺』4、1956、p.12、張慧珍、上掲書、p. 12-13、再引用
- (26) 東照宮事務所、『東照宮史』、1927、p.36
- (27) 小松茂美 編、『東照宮緣起』、中央公論社、1994、p.200

- (28) 宮本健次、『江戸の陰陽師』、人文書院、2001、p.18
- (29) 黑板勝美 編、「大猷院殿御實紀」卷 54、『徳川實紀』、吉川弘文館、1966、p. 323 朝鮮人來朝の節 御威光異國
- (30) 致祭は臣下が 祭祀をするという意味であるが参拝または参詣にはこのような意味はない。崔宗一、上掲書、p. 1
- (31) 林羅山、「東照宮粉牆石階下左有朝鮮所貢之鐘樓銘以記之 因駕焉 其右有中山國王所獻大銅燈籠亦駕焉」『林羅山詩集』卷 第 5、p.61
- (32) 林羅山、「是日雨口號三章」、『林羅山詩集』卷第 4、p.54
- (33) チョン・ハミ、「日本近世の神國思想」、『日本思想』第 10、韓國日本思想史學會、2006、参照
- (34) 林羅山、「次向陽子題日光山中詩韻 絕句八首律詩一首 東照宮」、『林羅山詩集』卷第 5、p. 63
- (35) 『通航一覽』卷 88、國書刊行會、1913、p. 23
- (36) 『通航一覽』卷 88、前掲書
- (37) Herman Ooms 著 黒住眞・清水正之・豊澤一・頼住光子、『徳川イデオロギー』、ペリかん社、1997、p.76
- (38) 李尚奎、「仁祖代 前半 問慰行 研究」、『韓日關係史研究』35、韓日關係史學會、2010、p. 133
- (39) 『朝鮮王朝實錄』仁祖 14 年 丙子 (1636、崇禎 9) 7 月 23 日 (乙丑)「交隣之道、固當一遵定式、不可撓越、而如或事與時異、勢須變通、則不必膠守舊例、要之保國安民而已。近因日本事機、稍異前日、不得不爲彌縫之計。如馬才之送書式之改、靡不曲循馬島之請、而獨於禮單一事、未蒙准許、臣竊以爲非計也。當初本國、與家康結和時、家康新得志、盡反秀吉所爲、求和之意、出於至誠、專以和事、委諸島主、而島主之欲交我國、乃其至願、故禮單多少、原不掛意、然嫌其太薄、本島加備若干物件、以悅關白。〈中略〉臣以爲、寧被島主之譏、不可太爲靳固、以誤邊上事機也。且廣取武士、爲國家莫大之弊。」
- (40) 例をあげると 孝宗 3 年には 次のようなことがあった。1652 年 9 月 3 日に 東萊府使 尹文舉があげた 馳啓には「東萊府使尹文舉馳啓曰：「倭差齋島主書契而來、蓋日光山供佛香爐等物鑄送之請也。且見香爐銘文式樣、則書以朝鮮所鑄某物、獻於某所、而連書朝鮮二字於平行、無禮不恭甚矣。請送首譯李亨男、以爲爭辨之地。」令禮官議之、禮曹請議於大臣以定。領議政鄭太和等以爲：「島主所索香爐刻鑄之文、去朝鮮獻於某所六字及渠之年號、只書壬辰月日爲宜、請遣李亨男責諭以定。」從之。『朝鮮王朝實錄』、孝宗 9 卷、3 年 (1652 壬辰 / 順治 9 年) 9 月 10 日 (己卯)
- (41) 金世濂、「次權學官韻呈上使」、『槎上錄』、韓國古典翻譯院 <http://www.itkc.or.kr/> 検索日 2010.08.25
- (42) 金世濂、「對馬島作」、上掲書、韓國古典翻譯院 <http://www.itkc.or.kr/> 検索日 2010. 08. 25.
- (43) 南龍翼、「萊館書懷得長篇四十韻呈兩使兼示讀祝李文哉」、『扶桑日録』、乙未年 4 月 21 日條、韓國古典翻譯院、<http://www.itkc.or.kr/> 検索日 2010. 07. 15
- (44) 『通航一覽』卷 88、上掲書

- (45) 林羅山、「二荒倭訓近補陀洛故僧勝道以爲山號推稱觀音堅坐之地 二荒音轉爲日光 故密宗者流 以爲山名推稱毘盧遮那之場 皆是奪掠剽竊之術也 識者奈何云云」、『林羅山詩集』卷第 4, p. 48
- (46) 林羅山、「二荒倭訓近補陀洛故僧勝道以爲山號推稱觀音堅坐之地 二荒音轉爲日光 故密宗者流 以爲山名推稱毘盧遮那之場 皆是奪掠剽竊之術也 識者奈何云云」、『林羅山詩集』卷第 4, p.48
- (47) 南龍翼、「疊次前兩韻寄道春要和 答書附」、上掲書、韓國古典翻譯院 <http://www.itkc.or.kr/> 檢索日 2010.08.05
- 「A 扶桑朝日照機船。駕得長風涉大川。孤枕乍驚中夜夢。此身猶在一涯天。
漢節東來歲月遐。客中詩興惱煙霞。秋風一去歸鴻盡。孤負籬邊手種花。
法界初乘大願船。光山仙路度新川。歸來恍若瑤臺夢。始信壺中別有天。
仙界深深玉洞遐。武陵流水赤城霞。高僧住在雲深處。天女時時散彩花。< 南龍翼 >
- B 東坂輕輻西海船。如斯逝者可觀川。空明相照無蹤跡。水在長流月在天。
唐棣雖偲奈遠遐。較前綺語謫仙花。征衣濕盡士奉雪。認做還鄉錦上花。
一大乘如渡得船。三途何畏阻長川。白頭菩薩誦於地。金色瞿曇降自天。
深山合與市朝遐。酸飽撐腸不服霞。借問一心隨萬境。阿誰能轉妙蓮花。< 林羅山 >」

< 参考文献 >

『朝鮮王朝實錄』

『論語』

『東文選』

任統、『丙子本日記』

金世濂、『槎上錄』

趙綱、『東槎錄』

南龍翼、『扶桑日錄』

李植、『澤堂先生續集』

李明漢、『白洲集』

蔡裕後、『湖洲先生集』

東照宮事務所 (1927)、『東照宮史』

小松茂美 編 (1994)、『東照宮緣起』、中央公論社

黑板勝美 編 (1996)、『徳川實紀』、吉川弘文館

林羅山、『林羅山詩集』

『增訂交隣志』

ムンヨンギョ (2003)、「仁祖代 對日外交の性格」、『韓日關係史研究』第 19 集

李尚奎 (2010)、「仁祖代 前半 問慰行 研究」、『韓日關係史研究』35、韓日關係史學會

田大雄 (1974)、「William Empson の分析批評」、『英美語文研究』15、韓國英美語文學會

崔宗一 (1998)、『朝鮮通信使の日光山 致祭 研究』、江原大學校碩士論文

劉若愚 著 李章佑 譯 (1984)、『中國詩學』、同和出版社

日・朝 知識人の日光に対する見方とその相違

宮本健次（2001）、『江戸の陰陽師』、人文書院

Joseph Childers 著 黄鍾淵 訳（1999）、『現代文學文化批評用語辭典』、文學トンネ